



せい
ノグ星のお話

むらさきいろ

紫色のぼうし

うちゅう かなたの ノグという 惑星に、ノグ星人が 住んでいました。
ノグ星人は、体は 青く、目が 一つだけの、人なつこい 宇宙人です。
ノグ星人は、パジャマのような 紫色の 服を まとっていました。
ノグ星人は 紫色が 大好きです。彼らは、あざやかな 紫色の 樹液を
出す 木を 大切に していました。ノグ星人は、その樹液から 染料を
つく、それで 全ての 布を 紫色に 染めていました。

ノグ星には、プロギッシュ王という 王様が いました。堂々とした
立派な 王様で、全ての ノグ星人に こよなく 愛されていました。

王様は、しばしば 紫色の 変わった ぼうしを かぶっていました。
その ぼうしが お気に入りなのです。ところが、ある 悲しい日、その
ぼうしが なくなってしまいました。プロギッシュ王は、ぼうしが
なくなったことを 非常に 悲しみました。家来達は 1日中、城の 中を
すみずみまで 探し回りましたが、ぼうしは 見つかりませんでした。

プロギッシュ王は、最も 信頼できる 賢い 相談役達に 助けを 求めて、
こう 言いました。「なんじらなら、必ずや、私の 愛用の ぼうしを
み 見つけることが できよう。」

すると、賢い コントグが 切り出しました。「私の 思うに、昨日、
母君を お訪ねに なられた時、母君の お屋敷に ぼうしを おき忘れ
られたのではないかと 存じます。」

「ふむふむ、そうかも 知れん。」と、王様は 言いました。

「私は、王様が クータン¹ に 乗って 出がけられた 時に、頭から
お 落ちてしまったのではないかと 存じます。」と、偉大なる ベシヨットが
言いました。



¹ クータンは、ノグ星に 生息している、馬に 似た 動物。一つ目で 紫色の 毛を している。

「ふ〜む。それも^{かんが}考え^う得ることじゃな。」と、王様^{おうさま}は言いました。

「王様。私は、ほうしの^{おん}ありが^あを存じ上げております。」と、せっかちなダッシュフットが言いました。「昨夜、バルコニーにお立ちになられていた時は、^{さく}風が^や強うございました。それで、^{かぜ}風が^{あたま}頭の上から^{うへ}ほうしをさらっていったのでございましょう。その時分、^し風は^{ぶん}東に^{かぜ}向かって^むふいておりましたので、城の^{しろ}東側の^{ひがしがわ}野原を^の探せば、^{さが}必ずや、^み見つかることのでございましょう。」

「それもそうじゃな。」王座から立ち上がりながら、王様^{おうさま}は言いました。

「私は、なくなったほうしの^わことで^すわずらい過ぎて、くたびれてしまった。もう^{やす}休むゆえ、この件は、^{けん}有能な^{ゆうのう}なんじらの手に^て任せることに^{まか}する。なんじらなら、^{かなら}必ずや、^わ私のほうしを^み見つけるための^{ほうほう}方法を^{かんが}考え^つ付くであらう。みんなが^し仕事に^ご精を^{せい}出せるよう、^み見つけた^{もの}者にはほうびをつかわそうぞ。では、^わ私は^{やす}休むとする。」



王の^{おう}相談役^{そうだんやく}達は、どうしたらいいか、^{あつ}集まって^{そうだん}相談し^{はし}始めました。

「まず^{さいしよ}最初に^だだ。」と、ベシヨットが切り出しました。「ダッシュフットの^{かんが}考えは、^{かんぜん}完全に^あ当て^{はず}が外れておる。『風』とは^い言っても、それは、^{ただ}ただの^{かぜ}そよ風であつた。おうのほうしに^{なに}何が^お起こつたのか、^わ私が^い言ったことの^{かぜ}ほうが、ずっとありそうなことじゃ。」

「何ですと？」と、ダッシュフットがさげびました。「^{きみ}君の^い言ったことの^{ほう}ほうが、ありそうもないばかりが、われらの^{かしこ}賢い^{おう}王が^のクータンに^て乗って^{さい}出かける^{さい}際に、^おほうしが^お落ちないよう、^つしっかり^いくくり付けて^い行なかつた^{おも}と思うとは、^おばかげておる。」

すると、^いコントグが^い言いました。「^おお二方は、^{おう}王の^{ほうし}に^{なに}何が^お起きたのか、^いおろかな^い言い争いを^{つづ}続けるが^よ良からう。^だだが、^{おう}王の^{やくぞく}約束の^{ほうび}を^いいただくのは、^わこの^だ私だ。^{さく}たまたま^{おう}昨夜、^お王が^は母君を^おお訪ねに^{たす}なったのを^し知っておるのは、^わこの^は私^はなのだから。^は母君と^はお話しに^はなられた^{とき}時、^とほうしを取って^おどこかに^き置かれたに^い決まっておる。」

「友の^{とも}方々^{かたがた}。」おとなしいトシュギが^いていねいに^い言いました。
「主^{おう}のほうしが^いかように^いなくなつたか、みなさんはそれぞれ^よ良い^い意見^{いけん}をお持ちです。もしわれわれが^も身を^み低くして、^{ひく}たがいの^{いけん}意見^{いけん}に^み耳^{みみ}を^きかたむけ、協力^{きょうりよく}して^{さが}探^{さが}すなら、ほうしは^みきっと^み見つかるでしょう。」

「ダッシュフットの^{いけん}意見^{いけん}に^{みみ}耳^{みみ}を^か貸^かして、ほうし^{さが}探^{さが}しに^て手^かを^か貸^かすだと？」
ベショットが^い言いました。「偉大^{いだい}なる^いベショットが、ほうし^{さが}を^{さが}探^{さが}しに^い
野原^のをはいつくばると^いても^い言うのか！^い私の^{わがし}ことを^{なん}何^{なん}だ^{なん}と^{おも}思^{おも}つておる？
野ねずみか？」

「だが、昨日^{さくじつ}王^{おう}が^{とお}通^{とお}られた^{ばしょ}場所^{ばしょ}を、ただ^{はし}クータンを^い走^いらせて行^いけば、
ほうしが^みすく^みに^みでも^み見^みつがると^{かんが}考^{かんが}えるほう^{かんが}が、^{かんが}ばか^{かんが}ばかしい^{かんが}では^{かんが}ないか！」
ダッシュフットが^{かんが}さ^{かんが}げ^{かんが}び^{かんが}ました。

たがいの^{いけん}意見^{いけん}を^あけ^あな^あし^あ合^あう^あ言^いい^い争^いいは、^{えんえん}延^{えんえん}々^{えんえん}と^{つづ}続^{つづ}き^{つづ}ま^{つづ}し^{つづ}た。終^{しま}いに^{しま}
コントグが、自分^{じぶん}こそ^{にん}が^{にん}3^{にん}人^{にん}の^{うち}内^{うち}で^{もつと}最^{もつと}も^{かしこ}賢^{かしこ}い^{おき}のだ^{おき}と思^{おも}い^{おも}つ^{おも}つ、王^{おう}の^は主^はの^はほう^はび^はを^いだ^いれ^いとも^い分^わけ^わ合^あい^あた^あく^あな^あが^あつ^あた^あので、トシュギの^{もう}申^{もう}し^{もう}出^でを^で
母^{はは}君^{きみ}の^{いえ}家^{いえ}を^{さが}探^{さが}すのだと、^{ひろ}広^{ひろ}間^まを^と飛^とび^い出^いして^い行^いき^いま^いし^いた。

トシュギが、^{さが}探^{さが}す^ての^てを^て手^て伝^てお^てう^てと^てコン^{もう}ト^てグ^てに^て申^{もう}し^{もう}出^でま^でし^でたが、コン^{もう}ト^てグ^ては^で
王^{おう}の^はほう^はび^はを^いだ^いれ^いとも^い分^わけ^わ合^あい^あた^あく^あな^あが^あつ^あた^あので、トシュギの^{もう}申^{もう}し^{もう}出^でを^で
断^{ことわ}つ^{ことわ}て^{ことわ}し^{ことわ}ま^{ことわ}い^{ことわ}し^{ことわ}た。

ベショットも、すぐさま^{おうさま}王^{おうさま}様^{さま}が^のクータン^のに^{とお}乗^{とお}つて^{とお}通^{とお}り^{とお}が^もか^もつ^もた^も森^{もり}の^{もり}
中^{なか}を^{なか}探^{さが}しに^て出^いが^いけ^いて^い行^いき^いま^いし^いた。そして^のダッシュフットも、^の野^の原^{はら}に^{はら}
向^{むか}が^{むか}い^{むか}ま^{むか}し^{むか}た。この^{ふたり}2^{ふたり}人^{ふたり}も、トシュギの^て手^て伝^てい^てを^{ことわ}断^{ことわ}り^{ことわ}ま^{ことわ}し^{ことわ}た。

トシュギは^{ひとり}た^{ひとり}った^{ひとり}1^{ひとり}人^{ひとり}、^{ひろ}ほ^{ひろ}つ^{ひろ}ん^{ひろ}と^{のこ}広^{のこ}間^{のこ}に^と残^とさ^とれ^とま^とし^とた。友^{とも}が^{とも}
みな、^{そう}相^{そう}談^{だん}し^{だん}な^{だん}が^{だん}ら^{だん}協^{きょう}力^{りよく}して^{きょう}王^{おう}様^{さま}の^みほう^みし^みを^み見^みつ^みけ^みる^みこ^みと^みより^みも、
ほう^{かん}び^{かん}の^{かん}こ^{かん}と^{かん}ば^{かん}か^{かん}り^{かん}考^{かん}え^{かん}て^{かん}い^{かん}る^{かん}の^{かん}を^{かん}見^{かん}て、^{かな}悲^{かな}しく^{かな}な^{かな}つ^{かな}て^{かな}し^{かな}ま^{かな}い^{かな}し^{かな}た。

「^{わがし}私^{わがし}は^{わがし}た^{わがし}だ^{わがし}、^て手^て伝^てい^てた^てか^てつ^てた^てだ^てけ^てな^ての^てに^て。だ^{わがし}が^{わがし}み^{わがし}ん^{わがし}な^{わがし}、^{わがし}私^{わがし}に^{わがし}
^て手^て伝^てわ^てさ^てせ^てて^ては^てく^てれ^てない^て。」と、トシュギは^{おも}思^{おも}い^{おも}ま^{おも}し^{おも}た。



トシュギは 静かに 広間の すみに すわり、みんなの 帰りを 待ちました。ほうびは、
だれが もらうことになるのでしょうか。ふと、トシュギが 辺りを見回すと、王座にある
紫色の 大きな クッションに 出っぱりがあるのに 気づきました。

(出っぱりが あっちゃあ、王が すわられる 時、すわり心地が 悪からう。すわり心地
良くして 差し上げられるか、見てみるとしよう。)

トシュギが クッションを 持ち上げて 平らに しようとすると、その 出っぱりが
クッションの せいではなく、クッションの下にある ものの せいだと 分かりました。
何だろうと 手に 取って よく 見てみると、それは、王様の なくなった 紫色の ほうして
した。

ほうしが 見つかって、王様は さぞかし 大喜びするだろうと 考えると、トシュギは
思わず ほほえみました。

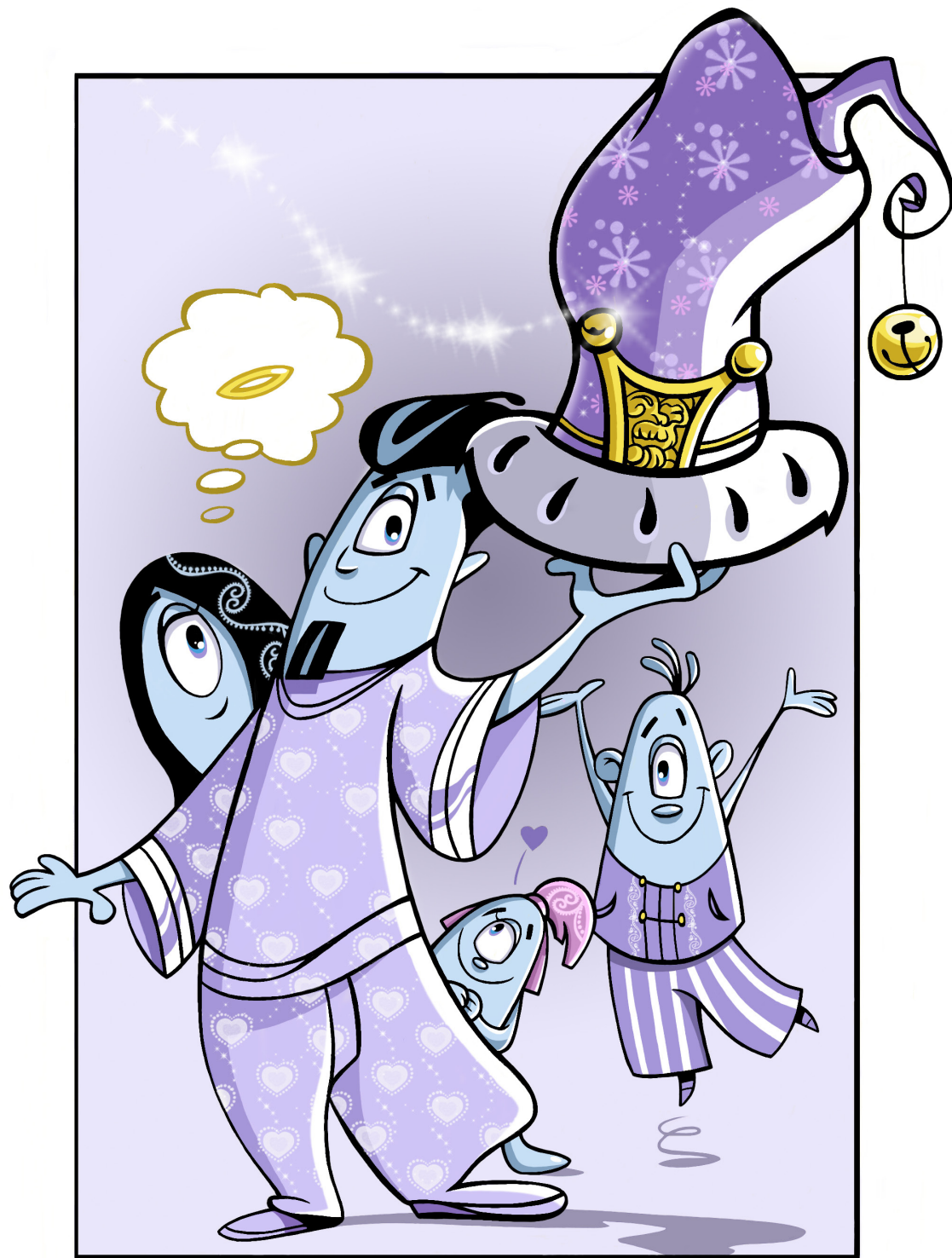


あくる日の 朝、王の 相談役の 4人全員が、再び 王様と 共に、広間に 集まりました。
賢い コントグと、偉大なる ベシヨットと、せっかちな ダッシュフットは めいめい、
王様の ほうしを 見つけるために 自分が どんなに 努力を 注ぎ、必死に 探し回ったかを、
王様に とくとくと 語りました。けれども 最初の 3人の 話は みんな、結局 ほうしを
見つけられなかったという 結末で 終わりました。

最後に、おとなしい トシュギの 番です。トシュギは 自分の 後ろから、王様の
お気に入りの 紫色の ほうしを出しました。きれいに 洗われ、形も 元通りに 整えられて
あります。王様は たいそう 喜んで、すくさま ほうしを がびりました。

「ほうしを 見つけてくれて ありがとうよ、トシュギ。さあ、約束の ほうびじゃ。」

城を 出ると、他の 3人の 相談役達が トシュギの 周りに 集まって来ました。みんな、
一体 どこで ほうしを 見つけたのが、聞きたくてしょうが なかったのです。トシュギは
つつましく、事の いきさつを 話して 聞かせました。



ベシヨットとダッシュフットとコントグは、だまっただまま
でした。最近の自分達のふるまいについて、深く考えて
いたのです。

「ダッシュフット、私は君にあやまらねば。」ベシヨットが
言いました。「王のほうしがどこでなくなったのが、君の
考えを見下したりして、悪かったよ。」

「ありがとう、ベシヨット。」ダッシュフットは答えました。
「だが、王のほうしは、バルコニーにおられた時やクータンに
の乗っておられた時に風で飛ばされたわけでもなかった。
私も、王のほうしを見つけるのに私の考えが一番だなんて
言い争ったことを、みんなにあやまるよ。」

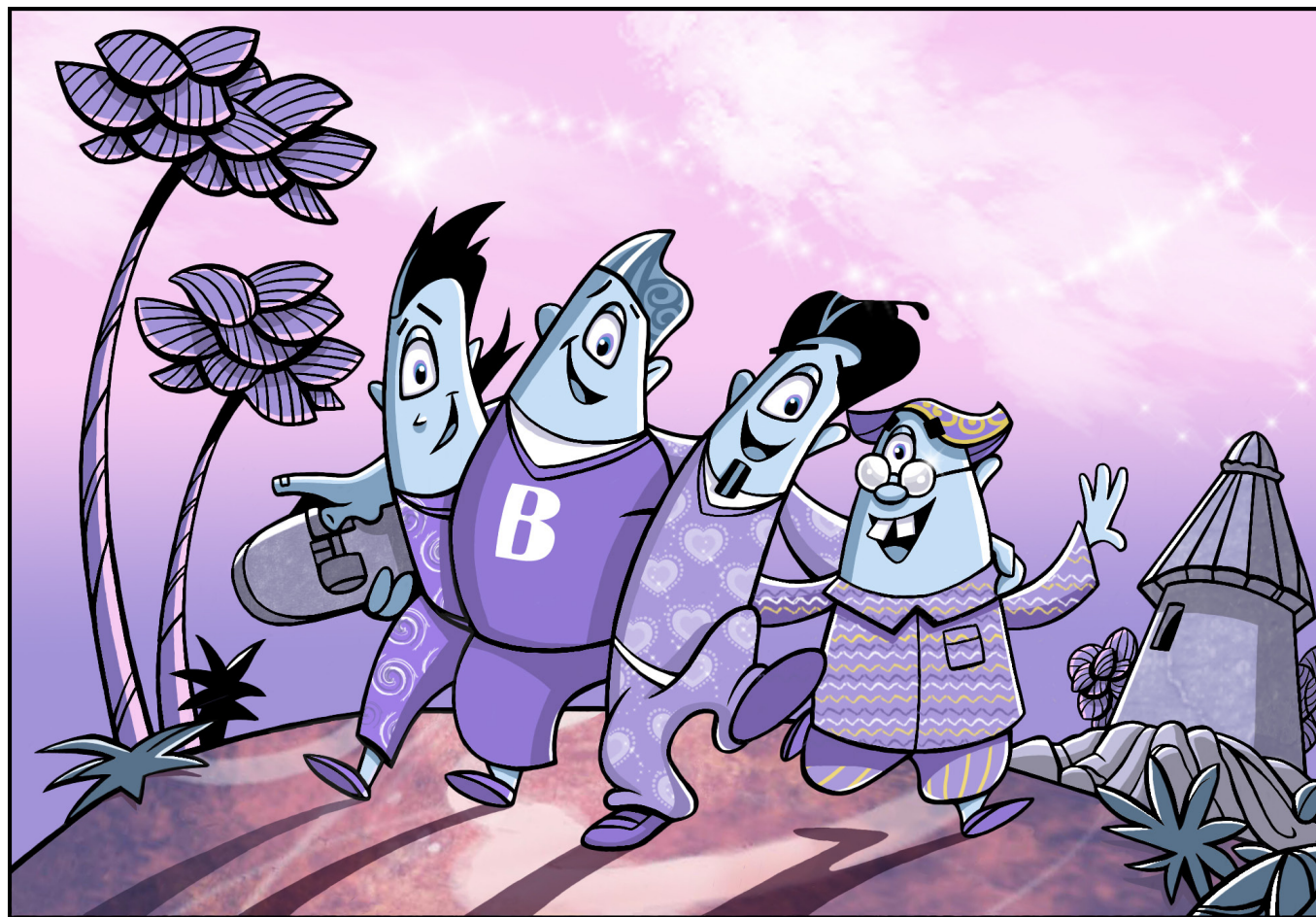
「私達はみんな、トシュギにあやまらねば。」と、コントグが
言いました。「トシュギ、君は私達がおたがい同士に耳を
貸すようにと言ってくれたが、私達はみんな、自分が正しい
ことを証明し、王の約束のほうびをもらうことばかり考えて
いて、君の言うことに耳を貸すことさえしなかった。」

「みんな、ほうびをひとりじめにしたがって、君の手伝い
さえ断ったよね。」ダッシュフットがトシュギに言いました。

「みなさん、ありがとう。」と、トシュギが言いました。
「気にしなさんな。王の心づくしのほうびで、いっしょに
ごちそうを食べに行きたいと思うのだが。来て下さるかな？」

「それはそれは！ 何ともありがたいことだ、トシュギ！」
コントグが声を上げました。「喜んで、お供させていただくよ。」

そして4人の相談役達は、ごちそうを食べながらたがいの
友情を楽しむために、連れ立って出かけて行ったのです。



文：レイラ・シェイとクリスティ・S・リンチ 絵：ジャン・マクレイ デザイン：ロイ・エバンス
出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル
“Once Upon Planet Nog: The Purple Hat”--Japanese
関連の読み物はこちら ⇒ 子供のための物語、謙遜、チームワーク